
艦魂たちともうひとつの日本海軍史外伝 砲艦「佐州」型

火龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

艦魂たちともうひとつの日本海軍史外伝 砲艦「佐州」型

【Nコード】

N0578BA

【作者名】

火龍

【あらすじ】

ロンドン海軍軍縮条約の失効を見据えた日本海軍は、将来出現するであろうアメリカの新型戦艦に対抗して「秋津洲」型戦艦の建造を計画する。ところが「秋津洲」型戦艦の主砲は余りに巨大であり、陸上のみならず海上での試射を求める声が上がった結果、連装砲塔を一基のみ搭載するという砲艦が建造されることになった。

本作は「艦魂たちともうひとつの日本海軍史」外伝第三弾です。

第一話 寄せ集め

ロンドン海軍軍縮条約の失効後、日本はアメリカの「ノースカロライナ」級や「サウスダコタ」級を仮想敵とした「秋津洲」型戦艦の建造に着手する予定であった。しかし彼女たちに搭載する五〇口径四六センチ砲は、装甲を張った場合は連装砲塔一基だけで重量が二千トン近くに及ぶなど、破格の大きさを持っていた。

それだけの大型砲塔になれば、製造や運用には今まで以上の技術が要求されることは明白である。そのため「秋津洲」型戦艦に搭載する主砲塔を試作及び試射することになったが、陸上に設置した状態での試験だけでは得られる試験結果が不十分であるとして、連装砲塔一基を搭載する実験艦のような砲艦の建造が提案された。

だがいくら新型戦艦建造に備えた技術蓄積のためとはいえ、一種類の主砲塔を試験するためだけに数千トンの軍艦を建造する余裕は日本に無い。そこでこの砲艦には、在来の艦艇に対する近代化改修で搭載される予定の電探や対空火器が寄せ集めのように搭載されることになった。

こうして四隻が建造されることになった兵装試験艦は、砲艦に類別され一番艦から順に「佐州」、「淡州」、「壱州」及び「対州」と命名。これはそれぞれ佐渡国、淡路国、壱岐国、そして対馬国の別名であり、命名基準も砲艦と同じであった。なお、要目は以下のとおり。

全長一四〇メートル、幅二八メートル、喫水三・五メートル、深さ一〇・五メートル
基準排水量九〇〇トン、満載排水量九九〇〇トン

機関石油専焼缶二基、タービン二基二軸、二四〇〇〇馬力、速力二〇ノット

航続距離一五ノット（一二〇〇〇馬力）で六〇〇〇海里、燃料搭載量二〇〇トン

・居住設備

士官・准士官・特務士官合計三六名（及び予備士官室）分、下士官一二〇名分、兵一八〇名分

その他、約三〇名分の便乗員用個室を設置（試験時の技術者等）

・兵装

五〇口径四六センチ連装砲一基二門（艦首）

五〇口径五インチ連装両用砲二基四門（艦橋左右に各一基）

四〇ミリ四連装機関砲二基八門（煙突後部）

二〇ミリ単装機銃四基四門（艦橋周辺）

この排水量は、ロンドン海軍軍縮条約における「特務艦」として扱われることを狙った数字である。現にイギリス海軍は、戦艦の保有枠とは別に軍縮条約の期間中も十五インチ（三八ミリ）連装砲塔を一基だけ装備した砲艦「マーシャル・ソルト」、「エレバス」及び「テラー」を保有していた。

そのため軍縮条約を気にせず起工できるのであるが、十八インチ連装砲塔の試作品が完成するまではおいそれと起工できない。大型の砲塔は進水までに搭載しておく必要があり、砲塔の製造が遅れば船体を早めに建造した意味が無くなってしまふからだ。

それどころか、船体の完成から砲塔の搭載までの間が空けば、それだけの期間は船台を占拠し続けることになる。将来発生する公算が大きい対米戦に備えて多数の商船や軍艦を建造したい日本にとって、一万トンクラスの艦船を建造できる貴重な船台が一ヶ所でも必要以上の期間に亘って使えなくなることは重大な問題であった。

しかし幸いにして砲塔の形式や砲身長が早期に決まったことや、これまでの主だった軍艦の主砲塔と同じ連装砲塔であったこと、そして何より日本の工業技術力が史実より大幅に改良されていたことで、一九三五年（史実ではこの三年後）に試作砲塔が完成した。

そして、一番艦「佐州」が一九三六年四月一日に起工されたのを初めとし、四番艦までが半年ごとに起工。起工から進水までに一年、進水から就役までさらに一年という工期で、これまで日本が建造してきた砲艦と比べると異例の長期建造であった。

史実では河用砲艦の「橋立」及び「宇治」でも一年半近く、イギリスが建造したほぼ同規模の「アバークロンビー」ではおよそ二年にも及び、砲艦やモニターという艦種そのものにとつてはさほど長すぎる工期ではない。だが勇が転移した後の日本は砲艦と言えば「羽州型」河用砲艦ぐらいしか建造していないので、相対的に長く思えるのだ。

そして一九三七年三月二十日、一番艦の「佐州」が横須賀工廠でほぼ予定どおりの期日に進水。勇はそれまでと同じく、新型艦船の一番艦の進水に立ち会ったために、海軍省から現地へと向かった。

第一話 寄せ集め（後書き）

作者「皆様、明けましておめでとう御座います」

富士「元日だろうとお構いなしの更新か……いや、今までもそうだったな」

作者「とはいえ既にネタは底を尽きかけ、このままではあと数か月で活動を休止せざるを得なくなるやもしれません。勇が現代に戻った後の話が書ければ、暫くはそれを書き続けられるでしょうが」

敷島「活動五年目に入ったって言うのに、弱気だねえ」

作者「それだけ切羽詰まっているということです。あるいは、もっと前からの歴史改変を描いてみるというのもありかも知れません」

三笠「それでは、次回予告をお願いします」

作者「砲艦『佐州』の艦魂が、誕生早々富士を狼狽えさせます。次回『心眼』ご期待ください」

第二話 心眼

同日、横須賀海軍工廠の船台。

「わかつてはいたが……どうも不自然なんだよなあ」

艦の前方に据え付けられた、船体の半分もの幅を有する砲塔。そして「大隅」型以来の戦艦とほぼ共通の、一四メートル測距儀を備え付けた艦橋。満載排水量でさえ一万トンに届かないこの艦には、何れも大きすぎる代物である。

他にも電探や高角砲、機関砲、そして機銃など、この艦には万が一の対米戦に備えて開発されている兵器の試作品が至る所に搭載されていた。最早砲艦というよりは、船の形をした新兵器の見本市と言ったほうがしっくりくる状態である。

「あ、有馬中将。こんにちは」

「有馬……なんだ、この化け物は」

「まるで、主砲を撃つ以外の全てを捨てているみたいだよ」

三笠は勇と会えたことで嬉しそうな表情だが、富士と敷島は「佐州」の外見に呆れ果てているようであった。二人ともこの艦の建造目的は知っているが、如何せん「佐州」の見た目が、それまでの軍艦からかけ離れすぎている所為である。

「こう言うのは憚られますが、日本刀一振りだけを持って死なば諸共飛びかかっていきそうな艦ですな」

「まあ、敵施設や砲台への砲撃には有効かもしれませんが……汎用性には欠けるでしょうね」

朝日の言葉は無理からぬものだったが、この艦には「飛びかかって」いくだけの足の速さはない。精々、大隅の言うように陸上の目標に対する艦砲射撃ぐらいしか、実戦におけるこの艦の利用法はなさそうであった。

「そろそろ、進水の時刻だ……三笠、取り敢えず艦橋の電信室（艦橋の根元にある部屋）に連れて行ってもらえるかな？」

「はい。艦橋の構造は、今までの戦艦と同じですよね？」

「ああ。よろしく頼む」

電信室へと降りたつた六人は、一先ず階段を下りて予備士官室へと向かう。予備士官室は中甲板の左舷艦首寄りに位置しており、艦橋の下からは少々距離があったものの、幸い他の人間に発見されることなく移動することができた。

「それでは、私は本艦の艦魂をここに連れて参りますので、暫しお待ちください」

そう言うと、大隅は予備士官室前から姿を消し、主砲塔の前に立つ。そして数分後、船台への注水によって浮き上がった「佐州」の艦首に現れた艦魂と遭遇した大隅は、簡単な挨拶と自己紹介を交わして「佐州」予備士官室に戻った。

「お初にお目にかかります。私が大日本帝国海軍『佐州』型砲艦一番艦、『佐州』の艦魂です。以後お見知りおきの程を」

大隅の隣にいたのは、上総をあどけなくしたような、それでいて眼光の鋭い艦魂であった。腰には短剣の他に長めの刀を二振りも提げており、全身から放つ威圧感と合わせて、彼女が生まれながらに

して剣術の才に恵まれていることを匂わせた。

（おそらく、私なら勝てるだろうが……朝日や上総が相手なら、さほど差は無いかもしれんな）

自分の後に敷島や朝日が佐州に対して名乗っている間、富士は口を噤んだまま、相手に悟られぬよう気を遣いながらもじつくりと佐州の力量を見極めようとする。すると一通り挨拶を交わした佐州が、ふと富士の方を振り向いた。

「私は貴方に仇為すつもりは御座いませんで、御安心を……貴方が日本に仇為さぬ限りにおいて、という条件付きではありますが」

自分の心中を見透かされたも同然の形になった富士は、佐州の言葉に動揺せざるを得ない。今まで彼女は新しい艦魂と出会うことに相手の身体能力や武術の腕を推し量る癖があったが、一度としてそれを見破られたことは無かったからだ。朝日や上総でさえできなかった芸当を、佐州は生まれたその日にやってのけたことになる。

「富士、どういうこと？」

「す、済まない。私は初めて艦魂と会うときは、そいつの力量を測ろうとする癖があつてな……だが、こうもはっきりと見破られたのは初めてだ」

富士の告白に、今度は富士と佐州以外の全員が驚く番であった。特に富士と一番付き合いの長い敷島は、朝日や上総の時も含めて富士が他の艦魂と初対面するという場に何度も居合わせていたにも拘らず、そのことに一切気付かないでいたから尚更である。

「朝日や上総も気付いた素振りさえ見せなかったというのに、こう

も真正面から宣言されるとはな……私が迂闊でなかったのだとすれば、
相当な洞察力を持っていることになる」

佐州が進水早々見せた才覚に、六人は驚きを通り越して最早戦慄していた。

第二話 心眼（後書き）

敷島「心眼の前で隠し事は不可能…… ってやつ？」

作者「一応、彼女は平均的な艦魂以上の視力を持っているという設定です。念のため」

大隅「で、目の部分に布を巻いているわけでもないのですね」

作者「ついでに言うと、丸っこい盾も使わない」

三笠「本編に関係があるようで殆ど関係の無い話はさておき、次回予告をお願いします」

作者「佐州が、砲撃試験の最中に涙を流す訳は一体？ 次回『活かせぬ力』ご期待ください」

第三話 活かせぬ力

進水した「佐州」の船体には、未だ試作品の域を出ていなかった当時の最新火器や電探が搭載されることとなる。これにより進水の時点で既に奇異な外観を呈していた「佐州」の船体は一層怪奇な見た目となっていくことになるが、試作兵器を多数装備しているというところで工員たちには厳しい緘口令が敷かれ、工廠の外で彼女の寛容はおるか存在そのものさえも噂になるようなことは無かった。

そして進水からおよそ一年後の一九三八年三月二十三日に艤装が成った「佐州」は、機関等の試験を経たうえで四月一日に日本海軍籍へと編入。その姿を横須賀軍港に現し、初めて彼女を目にした将兵たちの度肝を抜いたのであった。

数日後、横須賀沖。

「なんだあの化け物は……積んでる砲はどう見ても戦艦並みだぞ？」
「ひよつとしたら、砲塔は『因幡』型より大きいんじゃないか？」

もしこの砲を搭載してるのが通常の新鋭戦艦であれば、「佐州」の写真を見たアメリカの間諜によつて四六センチ砲であるかもしれないとの疑いを持たれたであろう。しかし「佐州」の見かけ上の大きさはイギリス軍が当時保有していた一五インチ砲搭載モニターである「エレバス」及び「マーシャル・ソルト」と大差なかったために、そのような事態は避けることができた。

加えて乾舷の高さが前述の二隻を大幅に上回っているため、二隻とは異なり砲塔の基部が完全に船体へと内蔵されていたのである。このことが砲塔の大きさを船体に比べて小さく見せることに一役買

い、事前に公式発表として公開された一六インチ砲であるとの偽情報信じ込まれる一因になった。

「戦艦ではない私が、一時的にとはいえ海軍で最大の艦砲を装備する艦になるとは……おかしな話だ」

甲板上に露出する部分を装甲の傾斜によつて可能な限り小さくまとめたとはいえ、直径十メートルを優に超える砲塔は否が応でも目立つ。その不自然さは当の佐州さえいまだに受け入れ難いものであり、この日も彼女は自分の砲塔を露天艦橋から見下ろしながら怪訝な表情を浮かべていた。

この日に初めてとなる主砲の発射試験を控えていた「佐州」は、この後横須賀の南方およそ五十海里の沖合まで移動。周囲に民間船、特に外国船舶がいると主砲発射時の衝撃や爆風から主砲口径が外部に推測される恐れがあるため、周辺の海域は沿岸警備隊が封鎖していた。

「撃ち方始め！」

主砲を左舷に向けた状態で、まずは「佐州」の主砲塔が交互撃ち方を開始する。同時に船体の前半部は満遍なく強烈な爆風に晒されることとなり、佐州のいる露天艦橋にも強い風が吹き荒んだ。

「す、凄い……まさかこれ程とは」

佐州が驚嘆している間も、爆風が幾度となく彼女の体を襲う。そして艦橋内部では水上砲撃時の射程距離や散布界の広さが計測されていき、史上最大の艦砲（イギリスの所謂「ハッシュ・ハッシュ・クルーザー」は正一八インチ、即ち四五・七二センチ砲）の詳細が

克明に記録されることとなった。

「よし、続いて左右同時発射を行う」

二門の四六センチ砲が同時に天を仰ぎ、四五度になったところではほぼ同時に火を噴く。左右双方の発射時における爆風がお互いの弾道に干渉しないよう、厳密に言えば二門の発射には僅かな時間差が存在するが、直後に艦全体を襲った烈風はそのようなことを微塵も感じさせないものであった。

「まずい、このままでは……っ！」

佐州は不意に襲った爆風によって吹き飛ばされそうになったが、慌てて目の前にあった双眼鏡にしがみついて事なきを得る。四六センチ砲の発射による爆風の威力は、通常「佐州」の主砲から露天艦橋まで程度の距離があっても人を吹き飛ばす程なのだが、史実の「大和」型戦艦に設けられていたような整流板を設けることで影響を最小限に抑えていた。

なお史実では、竣工時の戦艦「長門」において志願者を集めた上で露天艦橋に立たせ、主砲を斉射したところ爆風によって全員が壁や柱に叩きつけられた挙句気を失ったという。おまけに彼らが来ていた服のボタンも、多くが引き千切られたようになっていたとの証言が伝わっている。

「はあ、はあ……流石は世界一の巨砲、と言うべきか。これだけの砲があれば、『コロラド』級どころか『ノースカロライナ』級とて撃沈できる……はず」

息を荒げながら「できる」とまで言ったところで、佐州の声は急

に小さくなってしまう。それはいくら自分が強力な主砲を持っていたように、所詮は試験艦としての装備に過ぎず、敵の戦艦に対して発射することはまず有り得ないということに気付いてしまったからであつた。

「そう……だったな。私には、この砲を敵戦艦に向かって放つことなど到底許されない。所詮、私は試験艦に徹することしかできないのか」

やり場のない悔しさとも怒りともつかぬ感情が込み上げ、佐州は先程までとはうって変わって涙ぐんでしまう。程無くして、彼女は最後の砲撃試験を見届けることも無いまま、失意のうちに自室へと戻っていった。

第三話 活かせぬ力（後書き）

富士「しかし、試験が終わったらいっつはどうするのだ？」

作者「一応、用途は考えてあります。贅沢を言えば彼女たちのような特殊な艦にはさせたくないのですが、本来この任務に当たっていた艦が抜けてしまいますからどうしようもありません」

敷島「本職が抜ける……そういうことね。でも悔しいけれど、むしろ今の本職がやるよりも状況は改善されると思うよ」

三笠「確かに、いろいろと限界がありますからね……それでは、次回予告をお願いします」

作者「彼女たちが負った新たな役目とは一体？ 次回『使い回し』ご期待ください」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0578ba/>

艦魂たちともうひとつの日本海軍史外伝 砲艦「佐州」型

2012年1月5日05時46分発行